

朝鮮族と韓国人の相互認識に関する研究

—大学生への質問紙調査の結果から—

出羽孝行

(龍谷大学非常勤講師)

はじめに

朝鮮族社会の社会変動は顕著であり、「朝鮮族社会の人口減少、及び移動による朝鮮族集居区の解体は朝鮮族社会内部の連帯意識や親密感などに影響を与える」との林采完らの指摘は現実的なものとなりつつある。現在のところ延辺朝鮮族の民族アイデンティティは高度に維持されているとされるが⁽²⁾、漢語の必要性の高まりは、いずれは朝鮮語の社会的地位の相対的低下をもたらし、言語面のみならず朝鮮族の文化（言語・衣食住・価値観）の社会的位置付けの低下に繋がると考えられる。

そのようななか、中韓国交樹立以降、韓国との交流が活性化し、朝鮮族の居住地には多くの韓国人がやって来て、大量の韓国製品や韓国の大衆文化が流入してきた。ここから朝鮮族と韓国（人）との交流が活性化することにより、中国国内における朝鮮語や朝鮮文化の社会的地位が上昇し、それが朝鮮族学校の社会的地位の向上につながるのではないかと考えた。そこで本論文では朝鮮族と韓国人の相互認識状況を考察することによって、朝鮮族と韓国人が相互に影響しあい、韓国・中国といった既存の国家の枠組みを超えた関係が構築できる可能性について探ることとした⁽³⁾。

手順としては、朝鮮族と韓国人の交流状況を考察した後、筆者が2004年8月から9月にかけて韓国と中国延辺にある大学に通う学生を対象に実施した質問紙調査の結果を基に、韓国人と朝鮮族の相互交流や相互認識の状況について考察していくこととする。

1. 朝鮮族と韓国人の相互交流と問題点

（1）朝鮮族の韓国観の変遷

中国では朝鮮戦争時には多くの朝鮮族は中国人民志願軍として北朝鮮に派遣されて戦ったこともあり⁽⁴⁾、朝鮮族と韓国人の関係は長らく途絶えてきた。文化大革命時には韓国に親戚がいるというだけで問題にされかねなかったし、朝鮮族社会からみた韓国像は貧しく、ファッショ的な軍事独裁国家であったという⁽⁵⁾。

朝鮮族と韓国との交流関係の始まりは中国が改革開放政策を取り始めた1978年にまで遡る。この年より朝鮮族の韓国への親戚訪問が認められ、韓国への出国の始まりとなった⁽⁶⁾。その後、今日に至るまでの朝鮮族社会の韓国社会への認識の変化は、許明哲によると、3段階に分類できるという⁽⁷⁾。第1段階は1978年からソウルオリンピックが開催された1988年にかけて、第2段階は1988年から中韓国交が樹立された1992年にかけてであり、そして第3段階は1992年以降である。

中国の改革開放以後、朝鮮族は「韓国社会に対して多少なりとも好意的な印象を持ち始め」⁽⁸⁾、1986年にソウルで行われたアジア大会やソウルオリンピック開催を経て、中国にやってきた韓国人の良い印象や、韓国への親戚訪問を経験した人々が受けた同胞愛によって、韓国に対して非常に好意的な態度を持つようになったといふ⁽⁹⁾。それが第2段階では、朝鮮族にとって韓国は経済的成功をもたらしてくれる地との認識が高まるに従い朝鮮族の韓国への認識は変化し、第3段階になると「絶対多数の朝鮮族が韓国に出掛けようとする動機は単純に金儲けのため」⁽¹⁰⁾となり、彼らにとって韓国は民族的矜持心の対象ではなくなっていく。そして、朝鮮族社会と韓国社会の間の関係

は、「時間の流れに従って互いの理解と信任が深まっていかなければならぬのに、互いの不信と葛藤だけが次第に深まって⁽¹¹⁾いる傾向がみられる。以下の節で見るように、実際に朝鮮族の韓国への認識について言及したいいくつかの研究でもそのような結果が指摘されている⁽¹²⁾。

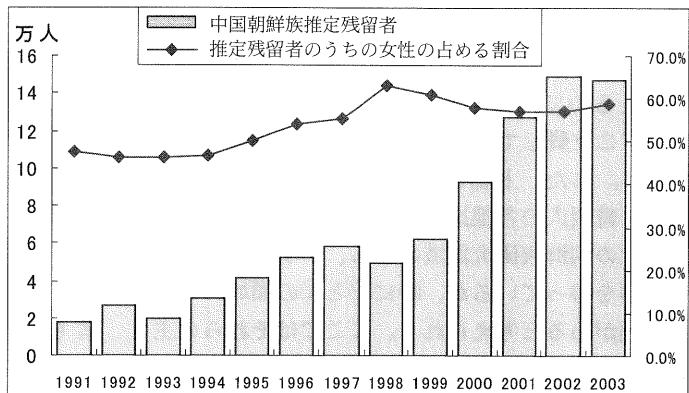
それに対して韓国人の朝鮮族に対する認識についての詳細な研究は、極めて限られており、後述するように多くの場合は朝鮮族からみたものである。例えば、韓国内に居住する朝鮮族の韓国観を調査した金明姫によると、朝鮮族達は、学ぶところのないつまらない存在として韓国人の目に自分達が映っているとしており、それが傲慢で排他的という韓国人に対する認識や、韓国観に繋がっているとする⁽¹³⁾。

（2）朝鮮族社会と韓国人社会の人的交流

韓国を訪れた朝鮮族の数は1983年以前までは88名、1985年度には378名、そして1987年度で708名と非常に限られていたが⁽¹⁴⁾、第3段階に入ろうとする1991年には3万人を越えるようになる⁽¹⁵⁾。

2002年末には韓国にいる不法滞在朝鮮族は、全不法滞在者の4分の1を占める8万名近くに上るといわれている⁽¹⁶⁾。韓国内在留朝鮮族の人数については韓国法務部出入国管理局が毎年発行している『出入国管理統計年報』の1991年統計（1992年発行）から掲出されている「韓国系中国人」により知ることができる。韓国入国者から出国者を除した数から年毎に国内残留者の推定を算出したところ、図1のようになった。これによると、2002年をピークに2003年は若干減少しているが、それでも約15万人弱が在留していることがわかる。この数は密入国者の数は網羅できないものの、他の論文や新聞記事などで出されている数字に近いものであり、ほぼ実態に近いものといえよう⁽¹⁷⁾。朝鮮族全体の人口が約192万人⁽¹⁸⁾であることを考えれば、12人から13人に1人の朝鮮族が韓国に在留している計算になる。朝鮮族に

図1 韓国での中国朝鮮族の推定残留者数と女性の占める割合



出典：法務部出入国管理局『出入国管理統計年報』1991～2003（1992～2004年発行）を用いて作成。

とって、韓国は自国で労働するよりも10倍以上の賃金を得られる出稼ぎの場であり⁽¹⁹⁾、彼らの多くは入国にあたり多額の現金をプローカーに渡してビザを得て、長期にわたり韓国に滞在しているといわれる。また、韓国では「在外同胞の出入国と法的地位に関する法律」（在外同胞法）に基づき、大韓民国国籍を有しない在外同胞に対して一定の条件のもと、韓国内での就労や居住の自由などを認めて内国人並みの待遇を保障しており、今後の同法の扱いによって朝鮮族の韓国内での立場は変化する可能性がある⁽²⁰⁾。

韓国人の中国渡航状況については、中韓国交樹立以降の渡航者数は大幅に増加しており、2003年には過去最高であった2002年よりも若干減少したが、それでも韓国人の出国先としては日本に次いで多い約158万人となっている⁽²¹⁾。この数は韓国の人口比率からすればごく僅かであるし、中国への渡航が朝鮮族の居住地区への渡航とは限らないため、韓国人が国内・海外含めて朝鮮族に接する機会は、朝鮮族が韓国人に接する機会に比較して極めて少ないと推測される。

（3）朝鮮族と韓国人への質問紙調査の課題設定

そのなかで朝鮮族の韓国観を質問紙調査などの実証的方法で明らかにした研究を概観してみたい。李汪宰によれば、韓国での朝鮮族研究領域は、①韓国社会での朝鮮族の文化適応、②南北朝鮮統一関連の研究、③中国の少数民族政策と関連した朝鮮族の位置、④中国同胞の韓国認識、⑤韓国と朝

鮮族同胞間の経済的交流と協力を挙げることができると指摘しているが⁽²²⁾、韓国での朝鮮族研究の傾向としては、朝鮮族を他の外国人集団と同様に捉えるのではなく、「同胞」や「僑胞」としての視点に立脚しているという特徴を挙げができる。また、上記5つの研究領域に加えて、朝鮮族と韓国人の各種比較研究も行われている。

上記の朝鮮族研究領域のうち、いずれも本論文に関連を持っているが、特に①と④の領域において関連があると考えられる。ここではそれらの主張について概観する。中韓国交成立直後の1993年に東北三省に居住する朝鮮族を対象に行った質問紙調査の結果から、李ペヨンらは朝鮮族の韓国に対する印象は経済的側面が強く、韓国と韓国人に対する認識はよいとはいえないものの、韓国への期待を持っている状況を述べている⁽²³⁾。この時点では朝鮮族の韓国に対する情報はマスメディアが中心であったという。

黄承淵は、韓国の仁川と天津を往復するフェリーに乗船して渡韓、または帰国する朝鮮族に対して1994年に質問紙調査を実施した結果を用いて、韓国との文化接触を通じた朝鮮族の韓国観の変化などについて論じている。それによれば、韓国を訪問した朝鮮族は「自民族集団アイデンティティの新たな確認」現象をみせ、韓国を否定的にみるようになる反面、朝鮮族に対して肯定的な態度を持ち、朝鮮族としての自己矜持心を持つに至っている⁽²⁴⁾。また金強一は、1997年に延辺に居住する朝鮮族に対して行った調査結果から、延辺の朝鮮族の韓国観は韓国社会の人情や価値観については否定的印象を持つものが多いものの、同一民族という感情的な側面が弱まり、自分たちと異なる価値観を有する存在として客観的な認識に転換しているとしている⁽²⁵⁾。そして李汪宰は、自身が行った調査から朝鮮族の韓国に対する認識は肯定的であり、特に2・3世の多くが「韓国民族」⁽²⁶⁾としての自己矜持心を持っているものの、韓国人としての同族意識よりは中国人としての意識がより強いことを指摘している⁽²⁷⁾。

上記の研究に加えて朝鮮族の韓国観に関する多くの研究において、朝鮮族は韓国との接触によって韓国人とは異なる存在であると認識するように

なるといったことや、中国人、又は中国国籍を持つ朝鮮族であると共に、朝鮮民族であるとの二重アイデンティティを持つに至るとの指摘がみられる⁽²⁸⁾。それに対し、ユニミョンギはこれまでの研究が結論付けてきたように、韓国との接触を通じて朝鮮族が必ずしも「中国人の朝鮮族」としてのアイデンティティを強化するとはいえないし、それは出身背景、学歴、職業などの違いによって異なるとし、実際に韓国社会に定着しようとする者も存在することを示している⁽²⁹⁾。また、先に触れた金明姫も韓国にいる朝鮮族のアイデンティティは1つに断定できないというように⁽³⁰⁾、朝鮮族は韓国人と自分たちは元々の民族は同じであるものの、別の存在だと認識するようになるとはいいけれないといえる。

さらに、韓国と中国との間でいわゆる「高句麗史問題」が外交問題に発展しており⁽³¹⁾、両国の歴史認識は朝鮮族の立場にも微妙に影響を及ぼすと思われる。その意味で、從来いわれてきたように朝鮮族は民族的には朝鮮であるが、国家意識は中国であるというのは普遍的な視点ではなく、流動性を秘めているとみるべきだろう。

これらのことを見据え、質問紙調査ではこれまで注目される機会が限られていた、韓国人の朝鮮族への認識と、朝鮮族の韓国観の関連をみて相互接觸や相互の関心との関連から両者の関係を考察することとした。

質問紙調査の実施・結果の分析にあたり、上記の研究や朝鮮族と韓国人の関係の現状を踏まえるとともに、本研究の調査対象者が大学生であるということを考慮して以下の仮説を設定した。

①朝鮮族が韓国や韓国人に接する機会は、韓国人が朝鮮族や朝鮮族社会に接する機会に比べて多いため、朝鮮族は韓国の社会、文化に対して関心を持っている反面、朝鮮族が韓国人に抱く関心ほどには韓国人は朝鮮族に対する関心は低い。

②相手に対してよい認識を持ち、関心が高いものほど、民族意識が高い⁽³²⁾。

これまでの朝鮮族と韓国人の関係からして、朝鮮族にとって韓国は文化的にも身近に感じられる

反面、韓国人は朝鮮族に対する印象があまりないのであとはと考えられる。また、朝鮮族と韓国人の相互認識や相互交流について考えると、韓国から朝鮮族を支援するという形だけではなく、互いに影響を与え合うという対等な関係が模索される必要があると思われ、そういう面にも着目する必要性があると考えた。

分析対象は大学生としたが、それは比較的人格が形成された年代ではあるが、ものの見方に柔軟性があると思われるからである。また、彼らはこれから朝鮮族と韓国人との関係を進める上で中心となるだろう世代であるとともに、大学での勉学・研究を通じて社会に対する関心を比較的高く持っている集団と考えられる。

表1 調査の概要

	韓国人大学生調査	朝鮮族大学生調査
調査時期	2004年8月・9月	2004年9月
実施機関	A大学	B大学
実施場所	ソウル特別市・嶺南地方の都市	吉林省延辺朝鮮族自治州の中心都市
調査対象人数	241名(男57名、女176名、不明8名)	191名(男44名、116名、不明31名)

表2 周囲の人たちの渡航・訪問経験(朝鮮族→韓国、韓国人→中国)

		現在滞在中	以前行ったことがある	まだないが行く予定がある	全くなし	合計	X ² 値
父	朝鮮族	37人 (20.6%)	25人 (13.9%)	18人 (10.0%)	100人 (55.6%)	180人 (100.0%)	46.447**
	韓国人	1人 (0.6%)	55人 (31.1%)	13人 (7.3%)	108人 (61.0%)	177人 (100.0%)	
母	朝鮮族	36人 (19.9%)	20人 (11.0%)	28人 (15.5%)	97人 (53.6%)	181人 (100.0%)	45.058**
	韓国人	0人 (0.0%)	38人 (21.8%)	19人 (10.9%)	117人 (67.2%)	174人 (100.0%)	
きょうだい	朝鮮族	16人 (9.8%)	12人 (7.4%)	24人 (14.7%)	111人 (68.1%)	163人 (100.0%)	13.463**
	韓国人	2人 (1.1%)	19人 (10.7%)	29人 (16.4%)	127人 (71.8%)	177人 (100.0%)	
祖父	朝鮮族	1人 (0.6%)	23人 (14.4%)	3人 (1.9%)	133人 (83.1%)	160人 (100.0%)	3.627
	韓国人	0人 (0.0%)	14人 (8.8%)	4人 (2.5%)	142人 (88.8%)	160人 (100.0%)	
祖母	朝鮮族	3人 (1.8%)	22人 (13.5%)	5人 (3.1%)	133人 (81.6%)	163人 (100.0%)	3.812
	韓国人	0人 (0.0%)	17人 (10.6%)	6人 (3.7%)	138人 (85.7%)	161人 (100.0%)	

*p<0.05、**p<0.01

2. 朝鮮族・韓国人大学生の相手への接触状況

(1) 朝鮮族と韓国人の大学生の相互認識に関する比較調査の概要

本調査は韓国の大学生と中国の朝鮮族大学生を対象としており、調査の概要は表1の通りである。韓国側の調査対象校であるA大学は韓国を代表する仏教系私立総合大学である。延辺の調査対象校であるB大学は、1990年代に複数の大学・学院が統合された大学であるため、各学院の系譜によりキャンパスは複数にまたがっている。また、延辺での調査の対象者の出生地は吉林省が84.7%で、延辺出生者は全体の65.1%を占めているが、延辺出生者とそれ以外では一部を除いて全体的な回答結果にはほとんど差はみられなかった。

なお、B大学の対象者のなかには大学院修士課程の学生14名を含んでいる。対象者の年齢は18歳から20歳台を中心であるが、A大学の調査対象として夜間開講科目の受講生が含まれている関係で、30歳台に朝鮮族1名、韓国人14名、40歳台では韓国人3名、そして50歳以上においては韓国人に1名みられ、韓国での調査のほうが調査対象者の年齢の幅が広い。

本調査は若干の年齢的なばらつきはあるものの、大学生を対象としているため、他の年齢層や職業層と比べて以下の特徴を持つと考えられる。まず、国家体制の違いによるイデオロギー的な抵抗感が相手に対して少ないという点である。冷戦終結後に学校教育を受けてきた世代にとっては、互いの国家を冷戦のみならず、朝鮮戦争での敵国

表3 テレビ番組・音楽への関心（朝鮮族のみの結果）

	n	平均値	標準偏差	t 値
韓国のテレビ番組 延辺の朝鮮語のテレビ番組	188	1.24 0.40	(0.78) (1.25)	7.808**
韓国のテレビ番組 漢語のテレビ番組	190	1.24 1.35	(0.78) (0.69)	-1.513
韓国の音楽 漢語の音楽	190	1.41 1.02	(0.71) (0.85)	5.608**

*p<0.05、**p<0.01

〈階級値〉+2：とても関心がある、+1：多少関心がある、0：どちらともいえない
-1：あまり関心がない、-2：全く関心がない

とはみなしていないと思われる。2つ目は、回答者達は現地社会では比較的高い階層であるという点である。韓国では高校卒業者の高等教育機関への進学率が2002年現在で74.2%⁽³³⁾にも及んでいるため、必ずしも「知識人」とはいえないが、大学の「大衆化」が進む中国でも、特に延辺のような地方では大学生は比較的社会的地位が高いと考えられる。従って、韓国人との交際相手も比較的社会的地位が高い人となる傾向がある⁽³⁴⁾。

（2）渡航経験

相手国への渡航経験の有無について調べたところ⁽³⁵⁾、韓国人は12.6%があるとしているのに対し、朝鮮族で韓国に訪問したことがあるのは4.3%に過ぎない。いずれも少数であるものの、両者の間には有意の差が認められた。但し、中国に行ったことのある韓国人にどこへ行ったかたずねたところ、東北地域と回答したのは2割に過ぎず、なかでも延辺と回答したのに至っては6.7%に過ぎなかった。このことから韓国人の渡航先のなかで中国は主要な行き先ではあるが、そのなかで朝鮮族と接した者は非常に限られているということがわかる。

一方、家族の渡航についてみると（表2）、朝鮮族のほうが滞在中とする回答が多く、「全くなし」との回答も韓国よりも少ないとわかる。特に父母においては実際に滞在中であるとする回答が朝鮮族で圧倒的に多く、前述した朝鮮族の韓国滞在者の増加はここでも確認することができる。それに対し、韓国人の父母やきょうだいについては、「以前行ったことがある」との回答が多い。また、父母・きょうだい・祖父母のいずれか1人

でも渡航経験があるとする回答（過去現在の渡航経験あり）は朝鮮族で57.2%、韓国人の場合は34.0%で朝鮮族のほうが有意に多かった。これらのことから、朝鮮族のほうが家族などから韓国情報を日常的に得ているのに対し、韓国人はそれが限られていると推測される。また、朝鮮族は韓国人と違って、韓国への渡航経験を有する家族が多く、韓国渡航がいわば「日常化」しているといえる。

（3）韓国人（朝鮮族）に接する機会

日常生活における相手の人々に接する機会についてたずねた結果については、朝鮮族側の対象者のうち、韓国人のスタッフが多い学部（学院）では日常的に韓国人に接している可能性があるので、それらの集団を除外して結果をみた。その結果、朝鮮族の場合、接する機会があるという回答のなかで最も多いのは「年に2～3回接觸している」の23.1%で、それに続いて「1週間に2～3回程度接觸している」が13.1%いる。「ほとんど接する機会はない」との回答は37.5%であり、半数以上の朝鮮族は少なくとも年に2～3回以上は韓国人に接していることが分かる。一方、韓国人の9割近くはほとんど朝鮮族に接触する機会がない。朝鮮族と韓国人の間には1%水準の有意差が認められ、相互接觸の状況には朝鮮族と韓国人との間に差異が存在していることが判明した。

さらに、上記の集計結果と同様に韓国人スタッフの多い学院の回答を除いて友人の有無についてみたところ、朝鮮族は韓国、中国に住んでいる韓国の友人は3割程度がいるのに対し、韓国・中国に住んでいる朝鮮族の友人とも95%以上の韓国人はいないと回答している。韓国人の側は無回答が多くいることを併せて考えれば、ほとんどが朝鮮族の友人がいないということになる。

これらの結果から韓国人は朝鮮族に接する機会がほとんどないのに比べると、朝鮮族にとって韓国人は身近な存在であることがわかる。こうした違いは、延辺全体に占める韓国人の居住・滞在人口の割合が韓国全体に占める朝鮮族の居住・滞在

者の割合よりも高いことに関係していると思われ、延辺における韓国人の存在感の強さを示している。また、たとえ韓国人に接する機会がなかったり、家族に韓国から帰ってきた人々がいなくても、衛星放送や韓国から入ってくる音楽テープなどによって韓国への情報が入ってくる機会が多い。表3は、朝鮮族が韓国のテレビ番組や音楽にどの程度関心を持っているかを見るために、韓国のテレビ番組と延辺の朝鮮語のテレビ番組、漢語のテレビ番組への関心、そして韓国の音楽と漢語の音楽への関心とをそれぞれ平均値で比較したものである。漢語のテレビ番組と比較すると韓国のテレビ番組への関心が若干低い値となっているが、有意差はみられない。それに対し、韓国のテレビ番組は延辺の番組テレビ放送よりも、そして韓国の音楽は漢語の音楽よりも有意に関心を持たれていること

がわかる。特に韓国のテレビに対しては9割近く、韓国の音楽に対しては9割以上の朝鮮族が関心を持っている⁽³⁶⁾。朝鮮族にとって韓国の音楽は言語の共通性に加えポップスが多く、韓国から音楽テープが入ってきており、朝鮮族の間にかなり浸透していることからこのような結果になったと思われる。これらの現状を鑑みると韓国や韓国人に対し、朝鮮族のほうが一定の認識（それが肯定的なものであれ否定的なものであれ）を持っていると考えることができよう。

3. 相手文化への認識

（1）相手への印象

図2（1）は朝鮮族による韓国への総体的印象、図2（2）は韓国人による朝鮮族への総体的印象をたずねた結果である。韓国への印象が悪いとする朝鮮族は15%で、半数以上の朝鮮族は韓国に対し良好な印象を抱いていることがわかる。また、朝鮮族への印象が悪いとした韓国人は10%強に過ぎないが、「とてもよい」との回答は2人（0.8

図2(1) 韓国への総体的印象

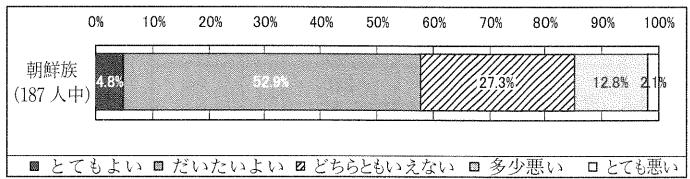


図2(2) 朝鮮族への総体的印象

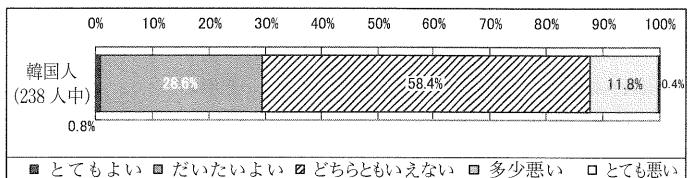
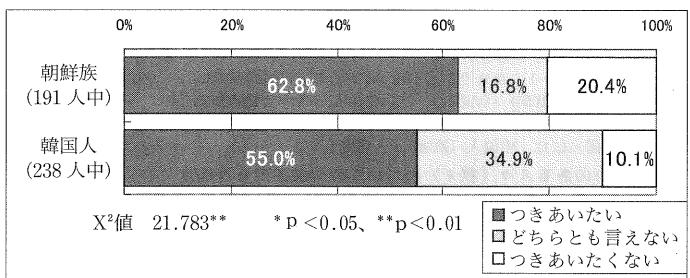


図3 韓国人（朝鮮人）の友人とつきあいたいか（3カテゴリー化）



%) と少なく、6割近くの韓国人は「どちらともいえない」との回答であった⁽³⁷⁾。これらのことから、朝鮮族にとって韓国の印象はよい反面、韓国人は朝鮮族に接する機会も少なく、印象を持ちにくいうことがわかる。

（2）相手の人への関心度

相手の人への関心度を考察するにあたり、双方に対して韓国人（朝鮮族）の友人とつきあいたいかを5段階尺度でたずねたものを3段階に整理したものが図3である。両者とも半数以上がつきあいたい側の回答をしている一方で「どちらともいえない」の回答が韓国人では3割以上を占め、その分肯定的な回答も否定的な回答も朝鮮族よりも少なかった。このことは、朝鮮族は韓国人に対して高い関心を有しているが、韓国人は朝鮮族の人々と接する機会が少ない分、はっきりと回答し難いということを表したものと思われる。

表4⁽³⁸⁾は、相手の人（朝鮮族の場合：韓国人、韓国人の場合：朝鮮族）と米国人、日本人、漢族（中国人）に関心があるかと5段階尺度でたずね

表4 相手の人に対する関心
(上段:n、中段:平均値、下段:標準偏差)

	朝鮮族	韓国人	t検定
韓国人(朝鮮族) への関心	190	241	0.552
	0.25 (1.01)	0.20 (0.95)	
漢族(中国人)への 関心	191	241	5.575**
	0.60> (0.96)	0.05 (1.08)	
米国人への関心	191	238	-0.418
	0.35 (1.16)	0.39 (1.05)	
日本人への関心	190	238	-3.365**
	0.52< (1.12)	0.87 (1.01)	

*p<0.05, **p<0.01

<階級値>+2:とても関心がある、+1:多少関心がある、0:どちらともいえない、-1:あまり関心がない、-2:全く関心がない

注:「韓国人(朝鮮族)への関心」は、韓国人の場合は朝鮮族のことを指す。また、「漢族(中国人)への関心」は、朝鮮族に対しては「漢族」、韓国人には「中国人(漢族)」と設定した。

表5 関心のある人々(表4)についての対応のあるt検定

	対象	n	対応サンプルの差		t値
			平均値	標準偏差	
朝鮮族	韓国人場 - 漢族	190	-0.35	(1.07)	-4.553**
	韓国人 - 米国人	190	-0.11	(1.26)	-1.148
	韓国人 - 日本人	189	-0.26	(1.24)	-2.868**
韓国人	朝鮮族 - 中国人	241	0.14	(0.87)	2.507*
	朝鮮族 - 米国人	238	-0.20	(1.24)	-2.466*
	朝鮮族 - 日本人	238	-0.68	(1.23)	-8.467**

*p<0.05, **p<0.01

表6 相手の国に対する好感度

(上段:n、中段:平均値、下段:標準偏差)

	朝鮮族	韓国人	t検定
韓国(中国)への 好感度	189	240	6.828**
	0.76> (0.79)	0.20 (0.90)	
北朝鮮への好感度	189	239	0.108
	0.06 (0.94)	0.05 (0.75)	
日本への好感度	189	240	0.238
	0.63 (1.00)	0.61 (0.94)	
米国への好感度	188	240	4.881**
	0.56> (1.02)	0.06 (1.08)	

*p<0.05, **p<0.01

<階級値>+2:とても好き、+1:多少好き、0:どちらともいえない、-1:多少嫌い、-2:とても嫌い

た結果を平均値で示したものである。そして、表5は朝鮮族と韓国人それぞれについて、相手の人とそれ以外の国・民族の人への関心の平均値に有意な差があるかを検定した結果である。朝鮮族の場合の「韓国人-米国人」以外、すべて有意差がみられるが⁽³⁹⁾、両者とも「韓国人(朝鮮族)」への関心は他の国の人々と比較して、むしろ低いくらいであった⁽⁴⁰⁾。このことから、両者とも相手の人々への関心は特別高いものとはいえないことがわかる。

(3) 相手国(社会)への関心度

表6は相手国、北朝鮮、日本、米国それぞれに対する好感度についてたずねた結果を平均値で示したものである。韓国(中国)への好感度では朝鮮族と韓国人の間に有意差が認められるが、これは韓国人の約4割が「どちらともいえない」と回答し、その割合は朝鮮族の2倍以上に達しているのが原因である。表7は朝鮮族、韓国人それぞれについて相手の国と、北朝鮮・日本・米国への好感度の平均値に有意な差があるかを検定した結果である。これらの表からわかることは、朝鮮族は北朝鮮や米国と比べて有意に韓国を好んでいるが、「韓国-日本」には好感度に差が認められないということである。韓国人の反応も北朝鮮と比べれば中国を好んでいるが、

日本や米国と比べて中国を好んでいるとはいえず、むしろ中国よりも日本を有意に好んでいる。朝鮮族にとって北朝鮮はこれまで最も身近な「外国」であったが、大学生世代にとっては特別な感情を持つ国とはなっていないことがわかる。また、米国に対する韓国人の好感度が非常に低いのは意外とも言えそうだが、近年の米韓関係の「冷却化」を反映した結果といえよう。

中国製品と韓国製品への関心度についてたずねた結果では、朝鮮族は韓国製品よりも中国製品に関心を持ち、韓国人は中国製品よりも韓国製品に對して関心を持っている結果がみられた。ただ、朝鮮族は韓国製品にも関心を持っていること(8割以上)が特筆できる。多くの朝鮮族は、1993

年時点において既に文房具や衣類を中心として韓国製品に触れる機会があり、彼らのなかでは韓国製品は値段が高く、品質は比較的よいほうだと認識していたというから⁽⁴¹⁾、単なる民族的愛着心から韓国製品に関心があるのではなく、現実的に判断をした結果を反映していると思われる。

次に、大学卒業後に日本・韓国・米国・延辺・延辺以外の中東北地方・中国沿岸部で就労することの是非をたずねた質問を設定したところ、両者とも相手国での就労は他の国（地域）と比較して希望するものではないことが判明した。朝鮮族は中国沿海部で働くことを最も希望し、その次に日本や韓国、米国での就労を希望していた。一方、韓国人の場合は、場所に関わらず中国での就労は半数以上が否定的であり、自国での就労を最も希望していた。この結果から朝鮮族はコリアンドリームを夢みて多くの人々が出稼ぎに出ている韓国での就労も、実はあまり理想的なものと考えていないことがわかる。これは韓国で就労する多くの人々の職種がいわゆる「3K」であり、韓国人から低待遇を受けているという情報が共有されていることによると思われる。このような傾向は、留学をしてみたい国をたずねた結果からも窺えた。

これらの結果からも朝鮮族、韓国人双方からして、お互いの国や地域を特別視していないことが理解できよう。

（4）結婚観

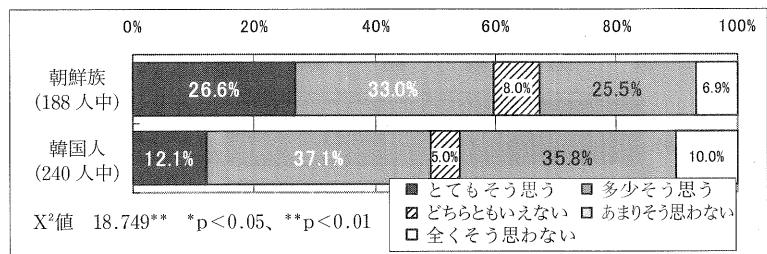
ここでは結婚観を考察してみたい。まず、朝鮮族（韓国人）は朝鮮族（韓国人）同士で結婚すべきと考えているかについては、図4のように両者の間に1%水準の有意差が認められた。6割の朝鮮族は同じ朝鮮族での結婚を理想系としているのに比較して、韓国人は同一民族（同一国民）同士

表7 相手の国に対する好感度（表6）についての対応のあるt検定

	対象	n	対応サンプルの差		t 値
			平均値	標準偏差	
朝鮮族	韓国 - 北朝鮮	189	0.70	(1.09)	8.800**
	韓国 - 日本	189	0.13	(1.14)	1.529
	韓国 - 米国	188	0.20	(1.21)	2.288*
韓国人	中国 - 北朝鮮	239	0.15	(1.09)	2.130*
	中国 - 日本	240	-0.41	(1.11)	-5.684**
	中国 - 米国	240	0.15	(1.20)	1.883

*p<0.05、**p<0.01

図4 朝鮮族（韓国人）は朝鮮族（韓国人）同士で結婚すべきか？



での結婚にこだわっていない。韓国人にとって、韓国人同士の結婚は自明であるのに対し、絶えず異民族と隣り合わせに生活している朝鮮族のほうが同胞同士の結婚を意識しているようである。

また、他の国・民族の人々との結婚に対する意識をたずねた回答でも朝鮮族は日本人などと比較しても韓国人との結婚に肯定的であるのに対し、韓国人は朝鮮族との結婚に特別肯定的といった結果はみられない。これらのことから、結婚に際して朝鮮族は民族的同質観ということから韓国人への結婚に肯定的であるのに対し、韓国人は必ずしも同一民族との視点から結婚観を捉えていないことが考えられる。

（5）相互認識

表8のように自分が朝鮮民族であることについてどう思うかとの質問の5段階尺度を3カテゴリ化した回答結果によれば、朝鮮族のほうが韓国人よりも有意に民族を意識している結果が表れた。同様に朝鮮民族としての矜持心についても、朝鮮族のほうが韓国人よりも有意に強いことを知ることができる。41.8%の韓国人は朝鮮民族としての矜持心の強弱について「どちらともいえない」

表8 朝鮮民族としての意識（3カテゴリー化）

		意識している	どちらともいえない	意識していない	合計	X ² 値
自分が「朝鮮民族（韓民族）」であることについて（3カテゴリー化）	朝鮮族	177人（96.7%）	4人（2.2%）	2人（1.1%）	183人（100.0%）	45.545**
	韓国人	172人（72.0%）	19人（7.9%）	48人（20.1%）	239人（100.0%）	
「朝鮮民族（韓民族）」としての矜持心（3カテゴリー化）	朝鮮族	152人（83.5%）	27人（14.8%）	3人（1.6%）	182人（100.0%）	58.021**
	韓国人	114人（47.7%）	100人（41.8%）	25人（10.5%）	239人（100.0%）	

図5 朝鮮族と韓国人との関係について

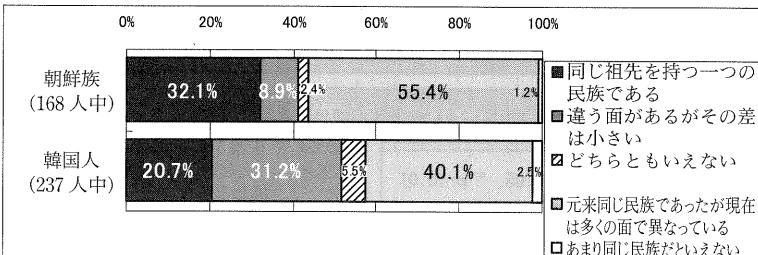


表9 両者の民族的同一性に関する平均値

(上段:n、中段:平均値、下段:標準偏差)

	国別比較		
	朝鮮族	韓国人	t値
使っている言葉	189	239	0.875
	0.13 (0.97)	0.05 (0.84)	
生活習慣	190	239	2.683**
	0.15> (0.98)	-0.09 (0.84)	
人間関係親密度	189	238	-2.850**
	-0.04< (0.98)	0.21 (0.85)	
ものの考え方	189	238	-3.803**
	-0.50< (0.94)	-0.17 (0.80)	

*p < 0.05, **p < 0.01

<階級値> +2 : 全く同じ、+2 : 少し同じ、0 : 場合によって異なる、-1 : 少し異なる、-2 : 全く異なる

と回答しているが、これは朝鮮族のほうが漢族のなかで社会的マイノリティとして暮らしている状況のなかで、自分の民族を意識する機会が多いということを示しているように思われる。

朝鮮族と韓国人が互いの民族についてどのように認識しているかについて知るために、朝鮮族と

韓国人の関係についてたずねた（図5）。両者とも最も回答者が多かったのが「元来同じ民族であったが現在は多くの面で異なる」であるが、全般的みて朝鮮族のほうが自分たちと韓国人との間の差異を認識していることがわかる。対して、韓国人のほうが朝鮮族との共通性を認識し、同じ民族との傾向がみられるとともに、両者とも「どちらともいえない」との回答が少なく、はっきりと意思表示をしているところが特徴である。

次に、各領域に両者の民族文化の認識についてみてみたい⁽⁴²⁾。表9は4領域毎の平均値であり、表10は対応平均値毎の差の検定を行った結果である。「使っている言葉」は朝鮮族、韓国人とも共通性を認識しているが、朝鮮族の場合はそれに並んで「生活・習慣」の共通性を強く認識しており、「人間関係親密度」や「ものの考え方」では韓国人のほうが同一性を感じている。価値観など目にみえにくい部分で朝鮮族は、韓国人よりも差を感じているというようによく解釈できよう。ただ、両者とも「ものの考え方」はマイナス値であり他の項目よりも最も差異を認識している部分である。4つの項目全てで2割から4割の人々が「場合によって異なる」と回答しており、両者とも自文化と相手の文化に対し、絶対的ではなく「緩やかに」違いを認識しはじめているといえよう。

4. 相互認識に影響を与える諸要因

ここでは相互接觸の有無や、相手への印象、相手の人・国への好感度と民族意識との関連について、平均値の差の検定結果を用いて考察する。

（1）相互の接觸が相手への印象に与える影響

実際に相手の国に行ったことのある回答者は限

られているため、渡航経験の有無による比較は難しいが、家族・親族（父・母・兄弟・祖父・祖母）のいずれかが相手国に行ったことがある、若しくは行っている最中であるとした回答者とそうでない回答者との間で、相手への認識や自身の民族意識などに差がみられるかを調べた結果、家族や親族の相手国への渡航経験は、相手への認識や自身の民族伝統文化に対する認識に影響を及ぼしていないことが判明した。

また、相手国に住む相手の友人がいる回答者といない回答者の間の差をみたところでは、韓国人の友人がいる朝鮮族は、いないとするものに比較して韓国を好み、また韓服や朝鮮の伝統家屋に関する心を持つが、民族矜持心の強さや韓国人との共通性に関しては、韓国人の友人の有無との関連はみられなかった⁽⁴³⁾。

（2）相互の関係が両者の民族性に与える影響

相手への印象、関心の程度が相互の関係や民族への考えに影響を与えるのか等について調べてみると、韓国に対する総体的印象がよいと回答したもの（「とてもよい」+「大体よい」）と「どちらともいえない」、「悪い」との回答（「多少悪い」+「とても悪い」）の3つの間で差を考察したところ（表11）、韓国に対する総体的印象がよいとした朝鮮族は、韓国人への関心や韓国への好感度を高く持つと共に、相手との文化的な共通性をより意識している。また、朝鮮族に対する総体的印象がよい韓国人は、同様に、朝鮮族や中国に対する認識が肯定的で、朝鮮族との文化的共通性を認識するという結果が認められた。

相手の人への関心についてみると（表11）、韓国に対する関心があるとする朝鮮族（「とても関心がある」+「多少関心がある」）ほど、韓国に対する総体的印象、韓国製品、韓国に対する関心や好感度がプラス方向であり、朝鮮民族としての矜持心も強い。これらの結果は韓国人の回答でもほぼ同様にみられたが、それに加えて相手への関心が高い韓国人は、朝鮮族との民族的共通性への認識が高いという傾向もみられた。このことから、

表10 対応のある平均値の差の検定結果（t値）

		生活習慣	人間関係親密度	ものの考え方
朝鮮族	使っている言葉	-0.211	2.036*	8.585**
	生活習慣		2.668**	8.586**
	人間関係親密度			6.416**
韓国人	使っている言葉	2.745**	-2.380*	3.324**
	生活習慣		-5.129**	1.370
	人間関係親密度			8.083**

*p<0.05、**p<0.01

相手の人への関心の高さと、相手との民族的共通性の認識や民族伝統文化への志向度の高さには関連があることが判明した。

また、韓国を好きだと回答した朝鮮族（「とても好き」+「多少好き」）は、「どちらともいえない」や「嫌い」（「多少嫌い」+「とても嫌い」）と回答したものに比べて、韓国製品や韓国人などに対する印象がよく、民族矜持心が強く、韓国人との民族的共通性を感じる傾向がみられた。中国を好きとする韓国人の場合も、中国製品や朝鮮族への関心が高く、民族矜持心が強固であることがわかった。

次に、朝鮮民族としての矜持心が強くない（「多少強くない」+「全く強くない」）と回答した朝鮮族は3名しかいないため明確にはいいがたいものの、民族的矜持心が強い朝鮮族は、韓国への好感度が高く、韓国人との民族的共通性を感じている結果がみられる。韓国人の場合、民族的矜持心の強いものほど朝鮮族への関心度や中国への好感度が高く、民族の伝統的な事物への好感度が高いという結果が顕著であった。

これらのことから、朝鮮族と韓国人の間には若干の違いはあるものの、相手の人や国、事物といったものに対する興味・関心は、相互に関連しており、個人の民族意識や相手との民族的共通性の認識度にも影響を与えていたことが判明した。両者の良好な関係を保持することは、朝鮮族のみならず、韓国人にとっても民族を大切する意識を持つ上で重要であることが導き出されたのである。中国という大国のなかで生活する朝鮮族の少数民族教育を維持していく上で、韓国や韓国人との交流や相互理解の促進は、非常に有効であると考え

表 11 相互の関係が相手の民族性等に与える影響について（上段：n、中段：平均値、下段：標準偏差）

*p<0.05、**p<0.01

番号		相手（朝鮮族→韓国人、韓国人→朝鮮族）への総体的印象								相手の人（朝鮮族→韓国人、韓国人→朝鮮族）への関心							
		朝鮮族				韓国人				朝鮮族				韓国人			
		よい	どちらともいえない	悪い	F 値	よい	どちらともいえない	悪い	F 値	関心がある	どちらともいえない	関心がない	F 値	関心がある	どちらともいえない	関心がない	F 値
1	相手の友人と付き合いたいか？	108 0.86 (0.92)	51 0.37 (0.94)	28 -0.18 (1.02)	15.148**	69 0.75 (0.79)	138 0.41 (0.78)	29 0.14 (1.03)	6.866**	86 1.00 (0.93)	53 0.49 (0.82)	51 -0.08 (1.00)	22.167**	114 0.90 (0.64)	61 0.38 (0.55)	63 -0.17 (0.93)	48.150**
		—	—	—	—	—	—	—	—	85 0.75 (0.67)	51 0.35 (0.80)	50 0.04 (1.01)	12.789**	114 0.38 (0.67)	60 0.00 (0.61)	64 -0.02 (0.55)	11.298**
2	韓国人（朝鮮族）に対する総体的印象	108 1.29 (0.71)	51 0.94 (0.76)	27 0.78 (0.97)	6.638**	69 1.38 (0.71)	139 1.11 (0.78)	29 0.97 (1.12)	3.604*	86 1.30 (0.78)	52 1.02 (0.64)	51 0.88 (0.91)	5.082**	113 1.35 (0.65)	62 1.08 (0.71)	64 0.94 (1.07)	6.112**
		107 1.34 (0.66)	50 1.26 (0.88)	28 1.21 (0.88)	0.372	69 0.28 (1.04)	139 -0.23 (1.00)	29 -0.48 (1.12)	7.755**	85 1.39 (0.71)	53 1.38 (0.60)	50 1.04 (0.92)	3.922*	113 0.15 (1.05)	62 -0.11 (0.98)	64 -0.55 (1.02)	9.513**
3	中国製品への関心	107 0.50 (0.94)	51 0.12 (0.99)	28 -0.46 (0.96)	12.118**	70 0.66 (0.83)	139 0.04 (0.90)	29 -0.17 (1.10)	13.504**	—	—	—	—	—	—	—	—
		107 0.21 (0.93)	51 0.18 (1.03)	27 -0.15 (1.03)	1.460	69 0.17 (0.86)	138 -0.01 (0.82)	29 0.07 (0.84)	1.085	86 0.22 (0.99)	51 0.22 (0.92)	51 -0.06 (0.95)	1.559	114 0.05 (0.86)	62 0.19 (0.72)	64 -0.08 (0.89)	1.675
4	韓国（中国）への好感度	107 1.01 (0.67)	51 0.69 (0.62)	27 -0.07 (0.92)	26.642**	69 0.58 (0.86)	139 0.09 (0.85)	29 -0.21 (0.98)	10.769**	85 1.08 (0.62)	52 0.77 (0.65)	51 0.24 (0.89)	22.790**	114 0.38 (0.89)	62 0.13 (0.82)	64 -0.03 (0.96)	4.615*
		107 0.21 (0.93)	51 0.18 (1.03)	27 -0.15 (1.03)	1.460	69 0.17 (0.86)	138 -0.01 (0.82)	29 0.07 (0.84)	1.085	86 0.22 (0.99)	51 0.22 (0.92)	51 -0.06 (0.95)	1.559	114 0.05 (0.86)	62 0.19 (0.72)	64 -0.08 (0.89)	1.675
5	両者の関係「使っている言葉」の共通性	108 0.32 (0.89)	51 0.14 (1.02)	27 -0.44 (0.97)	7.212**	69 0.25 (0.79)	138 -0.18 (0.82)	29 -0.45 (0.83)	9.561**	86 0.23 (0.99)	52 0.21 (0.94)	51 -0.08 (0.98)	1.818	114 -0.01 (0.87)	62 -0.10 (0.74)	63 -0.24 (0.87)	1.520
		107 0.13 (0.91)	51 -0.02 (0.93)	27 -0.67 (1.04)	7.843**	69 0.58 (0.72)	137 0.16 (0.82)	29 -0.38 (0.90)	15.321**	86 0.07 (0.93)	51 0.08 (0.98)	51 -0.35 (1.02)	3.608*	114 0.39 (0.80)	62 0.03 (0.72)	62 0.06 (0.99)	4.852**
6	両者の関係「生活・習慣」の共通性	108 0.46 (0.98)	51 -0.48 (0.84)	27 -0.63 (0.97)	0.343	69 0.14 (0.75)	137 -0.22 (0.76)	29 -0.72 (0.70)	14.148**	86 -0.40 (0.96)	51 -0.45 (0.94)	51 -0.69 (0.86)	1.624	114 -0.04 (0.78)	62 -0.24 (0.72)	62 -0.34 (0.87)	3.136*
		107 0.60 (1.32)	51 0.39 (1.18)	27 0.04 (1.40)	2.108	70 0.14 (1.21)	138 0.09 (1.29)	29 -0.28 (1.33)	1.188	85 0.75 (1.27)	52 0.44 (1.29)	50 0.04 (1.29)	4.890**	115 0.02 (1.25)	62 -0.06 (1.25)	63 0.24 (1.33)	0.977
7	両者の関係「人間関係の親密度」の共通性	103 1.75 (0.52)	49 1.82 (0.44)	27 1.48 (0.80)	3.390*	70 0.90 (0.97)	137 0.64 (1.16)	29 0.59 (1.09)	1.550	86 1.77 (0.48)	51 1.70 (0.68)	49 1.69 (0.55)	0.401	114 0.94 (1.00)	62 0.77 (0.98)	63 0.25 (1.24)	8.522**
		103 1.35 (0.78)	49 1.33 (0.72)	26 1.23 (0.95)	0.235	70 0.67 (0.85)	137 0.39 (0.85)	29 0.41 (0.95)	2.609	83 1.48 (0.70)	49 1.47 (0.68)	49 0.92 (0.89)	9.880**	114 0.68 (0.86)	62 0.34 (0.72)	63 0.25 (0.95)	6.376**
9	朝鮮族（韓国人）は朝鮮族（韓国人）同士結婚すべきか	105 1.93 (0.29)	50 1.82 (0.44)	27 1.96 (0.19)	2.540	70 1.84 (0.40)	136 1.85 (0.45)	29 1.83 (0.47)	0.020	83 1.93 (0.30)	52 1.88 (0.32)	50 1.90 (0.36)	0.300	114 1.89 (0.34)	61 1.70 (0.61)	63 1.89 (0.36)	4.308*
		105 1.47 (0.73)	50 1.30 (0.79)	27 1.30 (1.03)	0.982	70 1.24 (0.79)	136 1.07 (0.85)	29 1.00 (0.96)	1.230	83 1.55 (0.74)	52 1.23 (0.76)	50 1.32 (0.89)	3.057*	114 1.24 (0.77)	61 0.98 (0.92)	63 1.02 (0.89)	2.373
	朝鮮伝統家屋への好感度	105 1.14 (0.86)	50 0.90 (0.86)	27 0.81 (0.96)	2.235	70 1.36 (0.82)	136 1.17 (1.01)	29 1.10 (1.01)	1.441	83 1.29 (0.76)	52 0.79 (0.94)	50 0.84 (0.91)	7.153**	114 1.38 (0.77)	61 1.07 (0.96)	63 1.10 (0.82)	3.763*
		105 1.29 (0.90)	50 0.78 (0.97)	27 1.07 (1.00)	5.005**	70 1.54 (0.70)	136 1.49 (0.72)	29 1.52 (0.69)	0.117	83 1.35 (0.80)	52 0.81 (1.12)	50 1.02 (0.91)	5.712**	114 1.62 (0.62)	61 1.38 (0.82)	63 1.46 (0.71)	2.737

(階級値)

<番号1>+2：とてもつきあいたい、+1：多少つきあいたい、0：どちらともいえない、-1：あまりつきあいたくない、-2：全くつきあいたくない

<番号2>+2：とてもよい、+1：大体よい、0：どちらともいえない、-1：多少悪い、-2：とても悪い

<番号3>+2：とても関心がある、+1：多少関心がある、0：どちらともいえない、-1：あまり関心がない、-2：全く関心がない

<番号4>+2：とても好き、+1：多少好き、0：どちらともいえない、-1：多少嫌い、-2：とても嫌い

<番号5>+2：全く同じ、+1：多少同じ、0：場合によって異なる、-1：多少異なる、-2：全く異なる

<番号6>+2：とてもそう思う、+1：多少そう思う、0：どちらともいえない、-1：あまりそう思わない、-2：全くそう思わない

<番号7>+2：いつも意識している、+1：多少意識している、0：どちらともいえない、-1：あまり意識しない、-2：全く意識しない

<番号8>+2：とても強い、+1：多少強い、0：普通だ、-1：多少強くない、-2：全く強くない

<番号9>+2：とても好き、+1：多少好き、0：普通だ、-1：多少嫌い、-2：とても嫌い

○相手への好感度：「よい」は「とてもよい」と「大体よい」を合わせたもの。「悪い」は「多少悪い」と「とても悪い」を合わせたもの。

○相手の人への関心：「関心がある」は「とても関心がある」と「多少関心がある」を合わせたもの。「関心がない」は「あまり関心がない」と「全く関心がない」を合わせたもの。

られる。今後の朝鮮族教育は、韓国との関係が鍵を握っており、相互交流のあり方を模索していくことは、意味あることであることがわかった。

まとめ

本論文で明らかになった点は以下の通りである。

まず、朝鮮族は韓国人に接触する機会が比較的多いのに対し、韓国大学生は朝鮮族に接触する機会が限られていることが挙げられる。これは延辯の大学では韓国人留学生が一定数以上存在し、観光や業務などで延辯を訪れる韓国人がいるのに対し、韓国にやってくる朝鮮族は出稼ぎ労働者や韓国人男性との結婚を目的とした者が多く、そういった人々とは韓国大学生にとって、日常生活であまり関わりがないという実際の状況を反映したものであるといえる。割合的にも、延辯という朝鮮族の集住地域のなかで居住・滞在している韓国人に接する延辯朝鮮族のほうが、韓国人が自国で朝鮮族に接する機会よりも多いだろう。

2点目に朝鮮族の、韓国人への印象や関心は高いのに比べ、韓国人の朝鮮族への印象や関心は低くはないものの、判断がつかないという場合が多いということが判明した。また、両者とも他の国の人や社会と比較して、相手の人や社会に対して特別なものと認識しているわけではない。両者を比較した場合、朝鮮族のほうが相手への好感度が高く、韓国人は「どちらともいえない」とする回答が目立った要因としては、韓国人の朝鮮族との接触機会や情報の少なさが影響していると思われる。実際、韓国人の自由回答で朝鮮族のことは普段考えたことがないとの記述がいくつみられた。また、朝鮮族社会を漠然と遅れたものとみなしていた。

そして3点目に、相手国への親族の渡航経験や相手国に居住する友人の有無は、相手への印象・関心にあまり影響を与えていない反面、相手に対して関心を持ち、相手社会に好感を持つ朝鮮族は自民族を象徴するものに関心が高く、民族的矜持心がより強い傾向があるということがわかった。細かい点での違いはあるものの、これは韓国人についても同様にみられる傾向である。このことか

ら、朝鮮族が今後広く経験していくであろう民族教育の「危機」や、それと関連した言語をはじめとした民族文化の「弱体化」に対処するためには、朝鮮族と韓国との多様な形での交流が増加していくことで相互理解を深めていくことが有効であると確認された。これは、韓国人にとっても意義あるものといえる。

これらの結果から、質問紙調査を実施するにあたって設定した2つの仮説については以下のように結論付けることができる。まず、「朝鮮族が韓国や韓国人に接する機会は、韓国人が朝鮮族や朝鮮族社会に接する機会に比べて多いため、朝鮮族は韓国の社会、文化に対して関心を持っている反面、朝鮮族が韓国人に抱く関心ほどには韓国人は朝鮮族に対する関心は低い。」という仮説についてである。朝鮮族が韓国や韓国人に接する機会は、韓国人が朝鮮族に接する機会よりも多く、また韓国の社会や文化に関心を抱いているということはその通りであるが、韓国人の朝鮮族への関心が低いとは必ずしもいい切れない。確かに韓国では朝鮮族に対する情報は限定されており、韓国人は朝鮮族についてたずねた質問では回答保留がみられたが、それは単に関心の低さを表すものではなく、接する機会や情報が少ないために判断できないというものであった。また、朝鮮族の韓国人への関心にしても、日本人や米国人への関心と比較して特別高いものではなかった。その意味で相手への接触度と関心の高さとは直接の因果関係は認められないといえる。

2つ目の仮説「相手に対してよい認識を持ち、関心が高いものほど、民族意識が高い」という点については、肯定されたとみてよいだろう。朝鮮族と韓国人の相互交流関係を促進していくことは、朝鮮族の民族性を維持・発展させていくのに有効であり、本論文での調査結果でも朝鮮族、韓国人とも互いの友人とつきあいたいとしているように、今後は姉妹結縁をはじめとした、朝鮮族学校と韓国の学校との交流関係の促進による若い世代の交流の促進が重要になってくるだろう。但し、その際は韓国が朝鮮民族の中心という考え方ではなく、金強一の韓民族共同体に関する論述にみられるように、同じ民族でありながらも異なる社会で暮

らしている相手の立場を尊重していくことが必要となるだろう⁽⁴⁴⁾。

朝鮮族は、ナショナリティは中国、エスニシティは朝鮮民族といったように2つの概念を使い分けているといわれてきているが、今後の朝鮮族のナショナリティやエスニシティは、国際情勢によって変化することが予想される⁽⁴⁵⁾。韓国をはじめとした他国に居住する朝鮮民族との関係を維持していくことは朝鮮族にとって重要な意味を持つことだろう。

本論文での分析の限界として、質問紙調査の対象が大学生に限定されていることが挙げられる。そして、今後の課題としては韓国人と朝鮮族との交流の実態を調査することで問題点を解明し、どのような形で互いが接触していくのが最も望ましいかを調査し、国家を越えた民族関係の構築について論じていきたいと思う。

- (1) 林采完・金キョンハク（김경학）「中国朝鮮族の民族アイデンティティ調査研究」『大韓政治学会報』第10集 第1号、大韓政治学会、2002年、p.272。
- (2) 同上、pp.272 参照。
- (3) なお、本論文で対象とする朝鮮族は延辺地区の人々を中心とした。
- (4) 〈延辺朝鮮族自治州〉執筆班（著）・大村益夫（訳）『中国の朝鮮族』むくげの会、1987年、pp.88-94などを参照のこと。
- (5) 許明哲『転換期の延辺朝鮮族』遼寧民族出版社、2003年、p.171 参照。
- (6) 同上、pp.167-171 参照。
- (7) 同上、pp.172-176 参照。
- (8) 同上、p.172。
- (9) 同上、pp.172-173 参照。
- (10) 同上、p.175。
- (11) 同上、p.180。
- (12) たとえば、黃承淵「中国朝鮮族の韓国社会適応実態についての調査研究」『亞太研究』1、1、慶熙大学校亞太地域研究院、1994年、pp.183-208。また、朝鮮族が反韓感情を持つに至る理由として趙鏞官は、①韓国人が中国同胞の居住地で行った、数々の望ましくない行動のため、②中国同胞が韓国にやってきて韓国人から受ける傷のため、としている（趙鏞官「国内滞留中国同胞の問題点とその解決方案」『公安研究』第12卷第5号、公安問題研究所、p.24 参照）。
- (13) 金明姫「韓国内朝鮮族のアイデンティティと韓国観」『思想』第15卷第3号、社会科学院、2003年、p.

197。但し、金明姫自身が認めているようにこの調査対象者は労働者であり、彼らが日常的に接する韓国人は「3D」（日本でいう「3K」のこと）で就労する人たちであることから、ここでの結果が韓国に居住している朝鮮族をすべて代表しているとは限らない。

- (14) 許明哲、前掲書、p.174 の、『ハンギョレ新聞』からの引用による。
- (15) 法務部出入国管理局『出入国管理統計年報 1991』、1992年参照。以下、朝鮮族の韓国への出入国状況についてのデータは、『出入国管理統計年報』各年度を参照した。
- (16) 金明姫、前掲論文、p.183 参照。
- (17) たとえば、キム（S. Kim）は、複数のメディアの報告から在韓朝鮮族は15万人から20万人であるとしている（Si Joong Kim, “The Economic Status and Role of Ethnic Koreans in China”, C. Fred Bergsten and Inbom Choi (eds.), *The Korean Diaspora in the World Economy*, Institute for International Economics, 2003, p.116 参照）。
- (18) 2000年に実施された第五次人口調査によれば、朝鮮族の人口は192万3842人であった（中国国務院人口普查弁公室・国家統計局人口和社会科技統計司『中国2000年人口普查資料』（上冊）中国統計出版社、2002年、p.23 参照）。
- (19) 金ソンジヤ（김성자）『中国朝鮮族社会と韓国の交流から表れた問題点の研究』韓国外国语大学国際地域大学院韓国学科修士学位論文、2003年、p.34、p.38、及び趙鏞官「国内滞留中国同胞の問題点とその対策方案」『月刊 北韓』2000年6月号、p.94 参照。
- (20) 在外同胞法、及び同法の改正問題については崔ケス（최계수）「在外同胞法と在中韓人の法的地位」『OK Times』2004年5月号、海外僑胞問題研究所、2004年、pp.18-26などを参照のこと。
- (21) 法務部出入国管理局『出入国管理統計年報 2003』、2004年、p.8 参照。
- (22) 李汪宰「中国同胞の対韓国認識度に関する実証分析と政策提言」『韓国政策学会報』第10卷第2号、韓国政策学会、2001年、pp.253-254 参照。
- (23) 李ペヨン（이배용）・ハムニフングン（함홍근）・崔ワング（최완기）・崔ギュソン（최규성）・崔グンヨン（최근영）「在中国朝鮮族の韓国史認識と韓国観調査研究」『梨大史苑』27、梨大史学会、1994年、pp.5-53 参照。
- (24) 黃承淵、前掲論文、pp.183-208 参照。
- (25) 金強一「延辺朝鮮族の対南北観に関する実証的調査——韓中樹交以後の変化を中心に」『平和研究』第8号、高麗大学校平和研究所、1999年、pp.205-220 参照。
- (26) ここでは国民概念ではなく、民族概念として使用していると思われる。

- (27) 李汪宰、前掲論文、pp.243-267。
- (28) 朝鮮族が中国の朝鮮族や中国人としての自己認識と、朝鮮民族としての自己認識の二面性を持つとの指摘は、林采完・金キョンハク、前掲論文など複数の研究にみられる。金明姫は、韓国で居住した朝鮮族は「完璧な中国人（漢族）でもなく完璧な韓国人でもない／であることともできない境界的アイデンティティを形成」しているとしている（金明姫、前掲論文、pp.194-195 参照）。また、朝鮮族の二重アイデンティティは、李鋼哲「コリアン・ネットワークの形成と東北アジア経済圏——中国朝鮮族の位置付けと役割」『秋田経済法科大学 経済学部紀要』第37号、2003年、p.53-62 でも触れられている。
- (29) ユニミヨンギ（유명기）「民族と国民との間で——韓国在留朝鮮族のアイデンティティ認識に関する」『韓国文化人類学』第35集1号、韓国文化人類学会、2002年、pp.73-100 参照。
- (30) 金明姫、前掲論文、pp.198-199 参照。
- (31) 朝鮮族と高句麗問題との関わりについては、櫻井龍彦「高句麗はいざこへ——高句麗史をめぐる中国・北朝鮮・韓国のナショナリズム」櫻井龍彦編『東北亞細亞朝鮮民族の多角的研究』ユニテ、2004年、pp.66-102 など参照。
- (32) ここでいう民族意識とは自らの民族集団への帰属意識、或いは自らの民族に対する誇りといった意味のことである。
- (33) 統計庁『韓国の社会指標 2004』2004年、p.299 参照。
- (34) しかし、韓国に出稼ぎに行ったり結婚しに行ったりする朝鮮族が大卒層に少ないとはいえない。
- (35) 質問紙では渡航回数もたずねているが、渡航経験があるとした回答者のうち、2回以上の回数を答えたのは韓国人0名、朝鮮族3名であった。
- (36) 2000年に韓国放送公社（KBS）と漢陽大学校が行った調査によれば、延辺の朝鮮族は中国中央テレビよりもKBSの衛星放送を最もよく視聴しているという（尹テジン〈윤태진〉「延辺地域での韓国放送受容」『放送文化』2002年1月号、韓国放送協会、2002年、pp.18-21 参照）。
- (37) 朝鮮族の場合は「韓国に対する総体的印象」とし、韓国人については「朝鮮族に対する総体的印象」としたため、両者を比較する形で結果を掲出しなかった。
- (38) 質問毎に回答者数が異なるのは、無回答や回答違反などを除外しているためである。また、表5のように対応する項目を比較する際は比較対象となる項目全てに回答しているものを有効として集計している。以下の結果でも同様である。
- (39) 対応サンプル同士の平均値の差の検定をする際は、対応するサンプルの双方を回答しているものだけが有効回答となるので、独立サンプルの平均値の差の検定を行うときの有効回答数と異なる場合がある。
- (40) 日本人への関心の高さは、双方の対象者とも日本人への関心が高いと思われる日本語学科生（それぞれ約13%）が含まれているという要因にもよるし、調査者である筆者が日本人であるということとも関連していると思われる。下の項目で日本を好む韓国人の割合が高いのも同様の理由で説明可能である。
- (41) 李ペヨンら、前掲論文、pp.37-39 参照。
- (42) 文化の各領域については江淵一公が紹介しているボック（P. K. Bock）の文化概念を参照した。「使っている言葉」は言語体系、「生活・習慣」は道具技術体系、「人間関係親密度」は社会体系、「ものの考え方」は思想体系にそれぞれ対応するものとした。（江淵一公『異文化間教育学序説——移民・在留民の比較教育民族誌的分析』[第2版]』九州大学出版会、1997年、pp.40-41 参照）
- (43) 韓国人は朝鮮族の友人がいるとしたものがほとんどいなかったため、特に言及しなかった。
- (44) 金強一は世界の朝鮮民族が参加しあえる韓民族共同体を構築する上で、母国（韓国）中心的な発想の克服を主張し、それぞれの世界に居住する朝鮮民族の文化が尊重されなければならないとしている（金強一「韓民族共同体形成のための中国朝鮮族の役割」『地方行政研究』第15巻第1号、韓国地方行政研究院、2001年、pp.1-29 参照）。
- (45) 玄武岩は朝鮮族コミュニティの解体という危機をきっかけとして、朝鮮族が教育と文化の中心性を朝鮮半島に求めるようになる可能性について指摘している（玄武岩「越境する周辺——中国延辺朝鮮族自治州におけるエスニック空間の再編」『現代思想』第29巻第4号、青土社、2001年、p.215 参照）。
- ※ハングルの文献名については筆者が日本語に訳して掲出した。